

今日のお題は秦観^{しんかん}注^ツの〈詞〉〔減字木兰花〕〈天涯旧恨…〉でした。減字木蘭花^{げんじもくらんか}は〈詞牌〉^ツ、即ちメロディーの名称で、この作品には固有の題名が付いていません。〈詞〉では作品名はあってもなくてもかまわないのです。そこで同じメロディーの他の作品と区別するために、出だしの文句を題名の代わりに添えることがあります。その出だしの文句が〈天涯旧恨…〉です。前号では、南唐の李煜^{りいつく}の〈詞〉^ツをご紹介しましたが、この秦観^{しんかん}の作品は、宋代に特に栄えた〈宋词〉^{ソソツ}の一つです。

〈詞〉^ツは元々妓女達がメロディー付きで歌っていたもので、それに文人たちが歌詞を充てはめることから始まりました。現在メロディーは、そのままの形では残っていません。歌詞と、それから楽譜の一部が残っているだけです。

〔減字木兰花〕とは、元になる〔木兰花〕から若干文字を減らして短縮したことからこの名が付いています。

作者の秦観^{しんかん} (1049 ~ 1100年) は北宋の詩人でした。蘇東坡^{そとうぼ}の名で知られる蘇軾^{そしやく}の弟子で、黄庭堅^{わうていけん}、晁補之^{ちやうほし}、張耒^{ちやうらい}と並んで蘇門四学士のひとりでした。肖像画も残っていますが、なかなかの美男子だったと思われます。蘇東坡の妹で美女の苏小妹と恋仲になり、恋の詩を交わしたのち結ばれたというストーリーの小説や戯曲もあるそうで、なかなか隅に置けないお方だったようです。しかし、中国の舞台演劇で知られている小妹との恋愛はどうやら史実ではなかったようですが…。

王安石が宰相になって新法運動を起こした時、秦観は反対派の蘇軾の側にいたため、何度も左遷の憂き目に遭っています。この当時、エリート官僚が赴任先や左遷先で宴会接待を受けることは珍しくありませんでした。宴会があると必ず妓女を呼んだことから、妓女との間に恋が芽生えることも多かったようです。

しかし、左遷が解かれ任地を去る時、当然二人には別れがやってきます。男性の方は大抵郷里に両親や妻子が待っているのに、恋仲の妓女を連れて帰るわけにもいかず、多くの辛く悲しい別れの物語が生まれました。この詩は彼自身の経験もあるのかな、と思わせられるようなところもあります。

この詩は抒情詩なので、訓読の読み下し文にすると、元の詩の味わいがなくなってしまいます。植田先生の意識で味わってみましょう。

別離

別離の恨み果てしなく
問う人ぞ無き断腸^{だんちやう}の、
思ひ如何にと我が胸に

減字木兰花

作者：秦観

tiān yá jiù hèn ,
天 涯 旧 恨 ，
dú zì qī liáng rén bú wèn 。
独 自 凄 凉 人 不 问 。
yù jiàn huí cháng ,
欲 见 回 肠 ，
duàn jìn jīn lú xiǎo zhuàn xiāng 。
断 尽 金 炉 小 篆 香 。
dài é cháng liǎn ,
黛 蛾 长 敛 ，
rèn shì chūn fēng chuī bù zhǎn 。
任 是 春 风 吹 不 展 。
kūn yī wēi lóu ,
困 倚 危 楼 ，
guò jìn fēi hóng zì zì chóu 。
过 尽 飞 鸿 字 字 愁 。

訊かば乱るる香炉の煙
我が眉は顰めしままに、
東風吹けど展くに敢へず
高殿に物憂く倚りて見上ぐれば、
行く鴻は「愁」の文字にさも似たり。

男女の別れの気持ちを歌っていますが、どちらかと言うと女性の気持ちと思われまます。

別れがこんなにも辛く悲しいのに誰も問い掛けて訊いてくれる人もいない。「断腸の思い」と言う言葉にもあるように、腸とは心の事です。「回腸」とは複雑に乱れた心を表わします。「小篆香」とは宋の時代、上流階級の女性の部屋で焚かれたお香のことで、篆字のような複雑な形をしています。お香から立ち上るもやもやした煙のような気持ち、あるいは、その燃え尽きた篆字のあとが灰になって残ったような気持ちを表現しています。今風に言えば「私、燃え尽きちゃったのね～」っていう感でしょうか。

後半はもろに悲痛な女心を描いています。「黛蛾」とは眉のこと。「斂」とは引きつった顔、と言うことです。たとえ柔らかな春風が吹いても悲しみにくれた私に笑顔は戻って来ない。

眉を顰めた美女というイメージは、昔、越の国の美女西施が眉を顰めた表情がなんとも美しく魅力的であったという故事からきています。高殿に登って風景を眺める行為は、男性なら、故郷や妻子を懐かしむ、女性なら、帰らぬ人を待つという固定したイメージを持ちます。

高殿から空に羽ばたく鴻の群れを見ていると、その様子があたかも「愁」という字に見える、というのです。鴻は雁に似て雁よりも大きい渡り鳥のことで、ここでは雁と同じ意味に使われています。雁は遠くから便りを運んでくるという言い伝えが古くからあります。しかしその雁も便りを運んで

くれることはない。
空しく
その群れを眺めているうちに、その姿から「愁」という字が思い起こされる。「去っていったあのお方も同じ寂しい気持ちでいてくれるのではないか」という女心も読み取れます。

「秦観は非常にモテたようですね。まあ、モテないとかこういう詩を書けないですからねえ」と植田先生。相変わらず含蓄深い？先生のコメントに一同ニヤリと頷きました。この詩は、左遷先である妓女と懇ろになり、別れた経験があったことを匂わせています。「内容は恋の恨みつらみ、私達終わっちゃったのねという、どこか演歌やシャンソンっぽいのですが、秦観の作風は俗っぽくなく、上品なんですね」と、植田先生。

秦観は生涯このような正統派の抒情詩を作り続けました。〈詞〉はあまり日本では知られていないのですが、文学ジャンルの的には和歌や江戸小唄、というイメージで、女流作家も多いようです。蘇東坡は〈詞〉でも豪放派という男性らしい作品を残しましたが、秦観は繊細な女性っぽいスタイルの作風で知られており、〈詞〉においては男女間の機微を詠った作品を多く残しました。

赴任先の一時の恋、男性にのめり込んでしまった挙句、捨てられ寂しさにくれる女性。古今東西ありうる恋物語ですね。

秋が深まっていく季節にはピッタリの作品では

■注

秦観(しんかん)：1049～1100年。揚州高郵(江蘇省高郵市)出身。中国・北宋の詩人・政治家。

(ウィキペディアより)



秦観(ウィキペディアより)